

令和7年度
第44回
全国中学生人権作文コンテスト

広島地区大会

入賞作文集

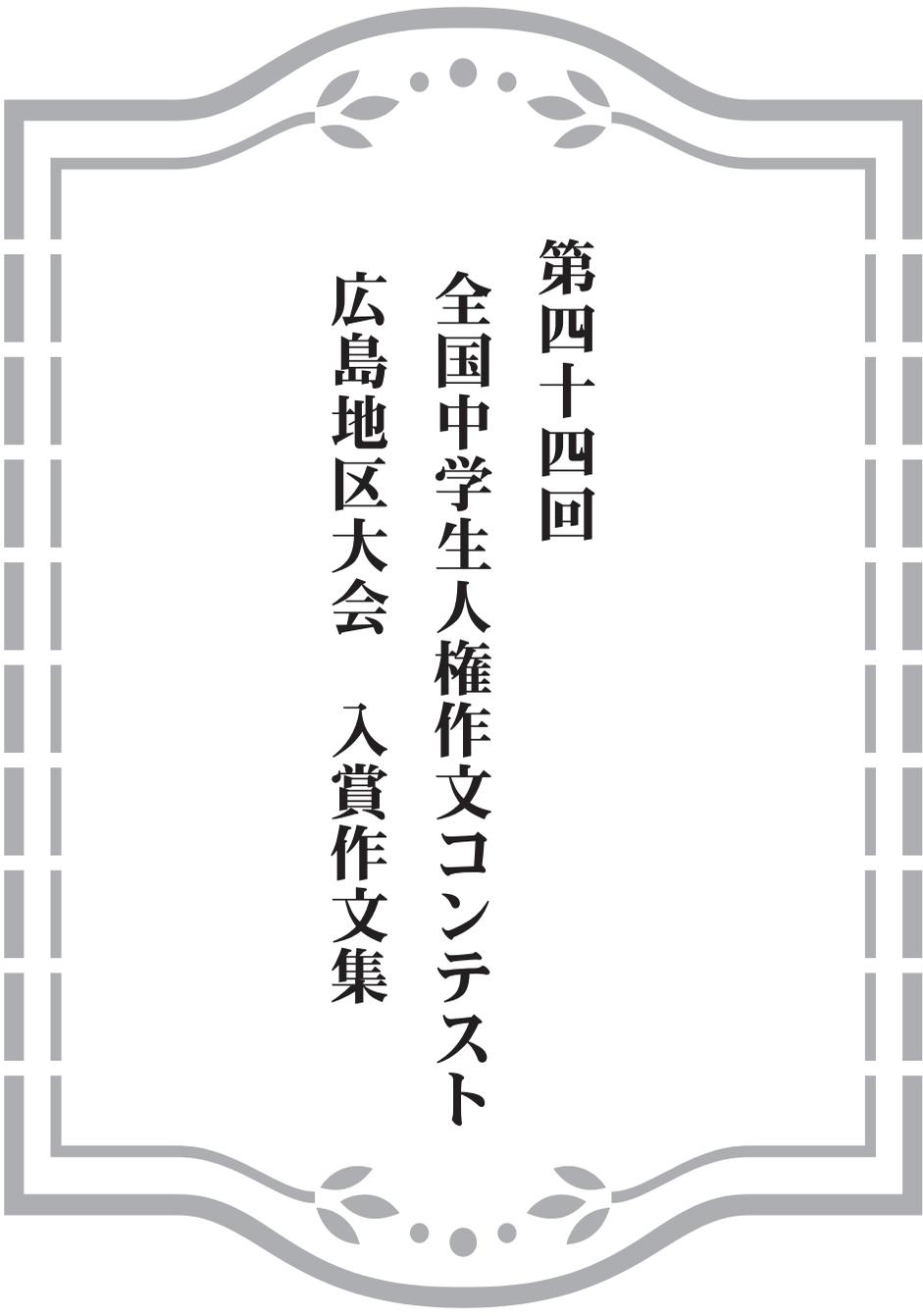


人権イメージキャラクター
人KENまもる君

人権イメージキャラクター
人KENあゆみちゃん



広島法務局・広島人権擁護委員協議会



第四十四回

全国中学生人権作文コンテスト

広島地区大会 入賞作文集

は し が き

この全国中学生人権作文コンテストは、次代を担う中学生に人権問題に関する作文を書くことを通して、人権尊重の重要性や必要性についての理解を深めるとともに、豊かな人権感覚を身に付けてもらうことを目的として実施しています。

本年度は、広島地区管内において41校より2876編の応募があり、いずれも中学生一人一人が、家族や友人との関わりの中で、人権に関する問題について悩み、懸命に考えている様子がうかがえました。また、こうした身近な人権問題のみならず、「紛争から平和な世界へ」など社会における人権問題にも真摯に向き合いながら自分なりの言葉で表現し、充実した読後感と深い感動を与えてくれています。

これらの素晴らしい作品（作文集）を、学校図書館に配架するのみならず、学級ごとに回覧して「朝の読書」の一冊に加えたり、お昼の給食放送や学年集会の一つの活動として係の人が読んで紹介したりするなど、一人でも多くの中学生の皆さんに触れていただくことを願っています。そして、「命」の尊さや「互いの違いを認め合い、相手の気持ちを考え、思いやることのできる心や態度」の大切さなど、豊かな人権感覚を身に付けることのできる契機になることを期待しています。

終わりに、応募してくださった生徒の皆さんはもとより、深いご理解と多大なご協力を賜りました学校の先生方、その他の関係者の方々に対して、心から感謝申し上げます。次回も、数多くの参加・応募があることを心より期待しています。

令和八年一月

第四十四回全国中学生人権作文コンテスト

広島地区大会審査会委員一同

目次

はしがき

【中央大会奨励賞・広島県大会最優秀賞（広島法務局長賞）・広島地区大会優秀賞】

見えない違い 生きる勇氣 広島市立瀬野川中学校 二年 中田 有俐…1

【広島県大会優秀賞・広島地区大会優秀賞】

守られる人権 府中町立府中緑ヶ丘中学校 三年 今津 由良…4

虹のような多様性を 広島市立吉島中学校 二年 匿名…8

【広島地区大会優秀賞】

違い 広島市立段原中学校 二年 田部 樹真…12

「尊重し合う事の大切さ」

広島市立五日市南中学校

二年 谷本 彩…14

心の見えない傷と向き合って

広島市立瀬野川中学校

二年 坂口 遥…18

分類

広島市立瀬野川東中学校

三年 築山 真帆…21

相手の立場になって

広島市立伴中学校

三年 中植 菜月…24

【広島地区大会佳作】

宗教二世と出会って。

広島市立広島中等教育学校

二年 匿 名…27

「偏見」を無くす、第一歩

広島市立五日市南中学校

二年 田澤 三智花…31

誰もが生きやすい社会へ

広島市立仁保中学校

三年 義満 悠充里…34

私の本当に好きなもの

広島市立祇園中学校

二年 澄川 咲綾…37

いじめをなくすために

広島市立祇園中学校

二年 田中 陽菜…40

【中央大会奨励賞・広島県大会最優秀賞（広島法務局長賞）・広島地区大会優秀賞】

見えない違い　生きる勇氣

広島市立瀬野川中学校　二年　中　田　有　俐

僕には、生まれつき「障害」と呼ばれるものがある。だから、みんなと同じようにできないことがある。例えば勉強の進みが遅かったり、人より理解が追いつかないこともある。でも、そういった困難は見た目ではわかりにくく、周りの人にはなかなか伝わらない。

あるとき、授業中に答えをうまく言えなかった僕に、クラスメートが「え、なんでそんな簡単なものもできないの」と笑った。その一言は、何気なく放たれた言葉だったかもしれない。でも、僕にはその言葉が深く突き刺さり、「自分はここにいちやいけないかな」と何度も頭の中で繰り返し返された。

違いを「変」と呼ばれることが、こんなにも苦しいなんて、他の人には想像しにくいかもしれない。でも、僕にとってそれは、日常の中で何度も突きつけられる現実だった。例えば、みんなは簡単に解き進めていくなか、僕だけがその問題を解けなかった時、

「これもできないの、変なの」

とクラスメートの一人に鼻で笑われた。きっとその子は僕に冗談のつもりで言った。で

もその言葉は、僕の心に深く突き刺さった。

先を進むみんなの目は冷たくて、自分の周りにはもう誰もいない。置いて行かれた。いや、ついていけなかったんだと感じた。

そんなある日、休み時間に一人のクラスメートが僕に話しかけてきた。その子は僕の話や途中でさえぎらず、最後までちゃんと聞いてくれた。ただうなずきながら、黙って耳を傾けてくれた。それだけで、「自分を受け入れてもらえた」と心から思えた。そのとき、僕は気づいた。

人権って、「特別なこと」じゃないんだ。「一人の人間として、ちゃんと見てもらえること」それが当たり前にあるべき人権なんだと。

「障害者だから」「ふつうじゃないから」と距離を置く人もいる。でも、僕がほしいのは同情じゃない。「違いがあることは、おかしなことじゃない」という、当たり前前の理解だ。努力してもできないことはある。でもそれは、怠けているわけじゃない。僕は毎日、自分の中で必死に戦っている。

僕には、できないことも多い。でも逆に、できるようになったこともたくさんある。小学校のころは音読が苦手で、教科書を読むと声が震えてしまった。けれども、毎日少しずつ練習するうちに、今では前よりも自信を持って声に出せるようになった。その小さな成長は、僕にとっては大きな宝物だ。人よりゆっくりかもしれないけれど、確かに一歩ずつ前に進んでいる。

だから、誰かの心ない言葉に押しつぶされるような自分にはなりたくない。僕自身が、他の誰かを「一人の人間」としてちゃんと見られる人でありたい。困っている人を見かけたら、声をかけられる人でありたい。誰かの痛みを笑うのではなく、その痛みに寄り添える人でありたい。

そして何より、「自分のままでいい」と胸を張って言える社会に、僕は生きていたい。そのためには、僕自身も諦めずに挑戦し続けたい。たとえ小さな一歩でも、積み重ねれば道になる。

世の中には、僕のように「見えにくい障害」を抱えている人がたくさんいるはずだ。周りからは気づかれず、苦しさを一人で抱えている人もいるだろう。もし僕の経験や思いが、そんな誰かの「ひとりじゃない」という勇気につながるなら、それほどうれしいことはない。

僕は障害者。それでも僕は僕だ。

違いを抱えながらも生きていける世界を、

僕は信じたい。

【広島県大会優秀賞・広島地区大会優秀賞】

守られる人権

府中町立府中緑ヶ丘中学校 三年 今津 由良

人権とは何か、この作文を書くまでそんなことを考えたことがなかった。

調べているうちに私が人間らしく、自分らしく生きることができるのは、私の人権が私のまわりの人によって守られているからだと思った。

私は小学校四年生のときに同じクラスの女子数人から陰で悪口を言われ、口をきいてもらえず仲間外れにされた。どのくらいの間これが続いたのかは覚えていない。何がきっかけだったのか、それも今となっては覚えていない。小学四年生のときの私の頭の中はどうなっていたのか、何を感じて自分がどのくらい苦しんだのか。まだ幼かった私には、言葉で表現することは難しく、助けを求める方法も知らず、ある日視力低下という形で表に現れた。

突然目が見えにくくなり、近くも遠くも見えなくなった。学校からの連絡で病院を受診した時、父だけが診察室に呼ばれた。

目に異常がなくても、幼少期には精神的な要因がこのように急な視力低下となって表れることがあると説明をうけたと後で聞いた。

視力低下に続き、同様のことが聴力にも現れて、母は学校へ行き担任の先生と長く話をしていた。

私にとつての救いは、先生からも両親からも「何に苦しんでいるの？」「何があったの？」「どうしてほしいの？」と理由や解決方法を聞き出そうと急かされなかったことだと思う。

助けを求める方法や自分がどうすればこの環境から逃れることができるのか、変えることができるのか、幼いなりに自分の頭で考え、答えを見つける時間を与えてもらえたことは本当によかったと思う。

問題が起きて早く解決しなければいじめとして事が大きくなる可能性もあり、先生にとつても両親にとつても焦る気持ちもあったと思うが、私に合った対応の仕方を話し合つて見つけてくれようとしたことは、ありがたかった。

先生方は、相手の女子数人から話を聞き、解決方法を探ってくれた。

相手にもきつと言い分はあったのだと思う。

父は毎日話を聞いてくれた。私の言うことを一度も否定しなかったと思う。

母は私が一人になって孤独を感じないように、仕事を抜けて下校時にはつきそつてくれた。

ある日の下校時、横断歩道で信号待ちをしている中に女子数人がいて、こちらを見て何かヒソヒソ言っていた。自分の事を言われていると思ひ、違う道から帰りたいと言つ

たが、母は私の手を引き、その女子数人の近くで私と信号待ちをした。

「逃げずにいよう。」と言われた感じがした。

曖昧になっていく記憶の中でこの場面だけは今でも鮮明に覚えている。

相手の女子数人も、先生と話をしながら、反省し、変わろうとしている中で、私自身にも変化があったと思う。私にもきつと悪いところがあったと思いきや、自分から相手に話しかけることも

不安はあったが明るくふるまうようにし、逃げずに自分から相手に話しかけることもした。相手も少しずつ話しかけてくれるようになり、中にはきちんと謝ってくれた子もいた。

時間が経つ中で、いつの間にか普通の関係に戻り、今ではあんなこともあったねと笑い合えるようになった。

私の場合、お互いが変わろうと努力し、向かい合い共に成長した。

あの時の記憶が曖昧になって忘れかけているのは、解決し乗りこえたからだ。

どのくらいの間だったか覚えていないが、振り返ると、小学四年生の間、私は一日も欠席していなかった。辛かったことの方が記憶に残ってしまいがちだが、私に優しく楽しい時間を与えてくれた友達もいたし、声をかけ続けてくれた先生方もいた。夢中になれた習い事もあったし、家に帰れば味方しかいなかった。

思い出すと、いやなことをしてきた相手のことより、そばで支えてくれた優しい人たちのことばかりが頭に浮かぶ。

中には、私と同じような思いをしても解決できなかつたり、助けを求められない人も

いるかもしれない。そんな人がいたら、その人を救える立場になりたい。

私のした経験と、そのとき支えてくれた周りの人の優しさ、その人たちへの感謝を子どもたちに語れる大人になりたい。

虹のような多様性を

広島市立吉島中学校 二年 匿 名

私は自分の性別が分からない。体は女として生まれてきたが、心は男でも女でもないと感じている。そう言われても理解しがたいと思う。それと同じように私も、「男」や「女」の性別の感じ方を理解することができない。

私は周囲の環境にとっても恵まれていたと思う。髪は短く、メンズの服ばかり着ていても、友達はいつも「似合っている」と言ってくれた。小学校では、男女ともに仲が良く、荷物を男女で分けることも、差別することもなかった。だから私は中学生になるまで、自分の性別で悩むことはなかった。

中学校生活が始まって、私は衝撃を受けた。ロッカーや通学カバンの置き場所が、男女で分かれているのだ。ズボンかスカートかを選択できた制服も、ブレザーのボタンの位置に男女で違いがあった。そんなところにまで違いをつけて、何の意味があるのだろうと疑問に思った。男女で分かれている、たったそれだけのこともかもしれない。けれど、男女のどちらでもないと感じる私には、居場所がないように感じつらかった。誰にも相談することができず、居場所がない中どうやって生きていけばいいのか不安におそわれた。

それをきっかけに私は、性的少数者のことを表す言葉、「LGBTQ」について、本や

インターネットの記事を読んで調べるようになった。その中にLGBTQの象徴は虹、というワードが何度か出てきた。「性別は、虹のようにグラデーションで、たくさんの在り方がある」と意味を知り、その虹の中に私も含まれると思うと、なんだか嬉しかった。しかし、調べているうちに性的少数者の多くが、悪い印象を持たれたり、悪口や陰口を言われたりしていると分かった。私の周りに差別がないのは、「恵まれている」だけなのだと実感した。自分の性別が嫌になり、ちゃんとした性別に生まれてくれればよかったと何度も思った。

「○○ちゃんは、心は男の子なの？」

中学二年生になったある日、母に突然そう尋ねられ、ドキッとした。母は、私が女の子らしくないことを気にしていたのだろう。何と答えようか悩んだ。自分の性別をうまく伝えられないかもしれない。もしかしたら、気持ち悪いと思われるかもしれない。悲観的な考えが次々と出てくる。同時に、知ってほしいという思いも溢れ出した。結局、

「分からない」

と一言、小さな声で返すことしかできなかった。そんな曖昧な答えに母が

「そっか、今は分からないんだね」

と言って、優しく抱きしめてくれたとき、私が人と違っていても母は、私のことを「LGBTQの人」としてではなく、「私」として見てくれると感じた。胸がとても熱くなつて、何とも言えない思いが込み上げてきたことを、今でも鮮明に覚えている。それから

私は「LGBTQの自分」よりも、「自分らしい自分」を生きたいと思えた。

「LGBTQ」という言葉を広めることも重要だが、言葉を知るだけで認め合うことは難しいのではないだろうか。大事なものは、私たちが「LGBTQ」「性的少数者」である前に、同じ「人間」であるということだと思う。私が男女の感覚を理解できなかったように、当事者でない人が多様性を理解するには時間がかかるかもしれない。それでも同じ「人間」なのだから互いに思いやり、共に歩めるはずだ。多彩な虹は、一人一人の色を大切にできたとき、初めて美しく見える。

今、世の中の虹は美しいだろうか。LGBTQが多くの人に知られるようになり、私の学校でも、制服が選択できるようになったり、男女混合名簿が使用されたりしている。世の中は多様性を尊重しようとしているように感じる。一方でそれは表面的で、実際は人を差別する言葉として「LGBTQ」を使ったり、好きな制服を選ぶことで軽蔑されたりすることがあると知った。また、卒業式の座り方など、まだまだ男女で分かれているものが多い。私たち一人一人が意識して行動しなければ、社会は変わらないと思った。理解できないからと差別していかないだろうか。無意識な偏見で人を傷つけていないだろうか。意味のない男女の違いを作ること、苦しむ人がいるのではないか。すべての人が生きやすい社会のために、もう一度見直すのは私たちだ。

今、私は自分を隠さず自分らしく生きている。それが恵まれているからではなく、「あたりまえ」でなければならぬと思う。そのために私は、少数派の人に対して「

「GRTQの人」、「外国の人」、「障がいがある人」などとレッテルを貼らず、その人らしきに目を向きたい。そうしたら、一緒に喜びや悲しさを感じ、時には衝突しあう「仲間」であることに気づくはずだ。明日、虹のような多様性が、あたりまえになる日が来ることを願っている。

【広島地区大会優秀賞】

違い

広島市立段原中学校 二年 田部 樹 真

僕は、アフリカのタンザニアと日本のハーフだ。肌の色は少し黒くて、髪の毛はくるくるしている。小さいころから、見た目が違うことでからかわれたことがある。「その髪どうなってんの?」「日焼けしすぎじゃない?」そんなことを言われたとき、僕は笑ってごまかすしかなかった。本当は傷ついていて。でも、泣いたり怒ったりしたら、「冗談なのに」と言われるのがわかっていたから、黙ってやりすごしていた。「なんで自分はほかの子と違うんだろう」と思ったこともあった。

でも、そんなある日、運動会のリレーで走ったときのことだった。僕は足が速くて、前を走っていた子を抜いて、そのままゴールにつなげた。その時、みんなが「すげえー」と声をあげてくれて、ハイタッチをしてくれた。肌の色や髪の毛のことを言う人もいたけれど、足の速さや努力しているところを見て、認めてくれる人もちゃんとした。少しだけ、自分のことが好きになれた気がした。

それからは、くるくるの髪や茶色い肌も、僕の一部だと思えるようになってきた。世界には、いろいろな国の人がいて、いろいろな見た目や文化がある。僕の見えた目も、そ

の中のひとつなんだと思ったら、少し自信が持てるようになった。

あるとき、クラスで人権について学ぶ授業があった。「みんな違ってみんないい」という言葉が黒板に書かれていて、「ちがいを知ることが、人を大切にする第一歩です」と話してくれた。そのとき、僕はうなずきながら、「僕にも言えることがあるかもしれない」と思った。僕はまだ、自分から「やめて」と言えるほど強くはない。だけど、誰かが同じようにからかわれていたら、「それはちがうよ」と言いたい。人を見た目だけで判断したり、笑ったりするのは、その人の心を傷つけることになる。僕は、そういうことをしない人になりたい。

自分を大切に思えるようになった今、僕は「人権」という言葉が少し身近に感じられるようになった。人権を守るって、特別なことじゃなくて、目の前の誰かの気持ちを考えることなんだと思う。

違いは悪いことじゃない。違いがあるからこそ、世界はカラフルで、おもしろい。僕のくるくるの髪も、茶色い肌も、その一部なんだ。これからも、自分らしさを大事にしながら、前を向いて歩いていきたい。そして、いつか誰かがつらい思いをしていたら、そっと声をかけられる人になりたい。違いを笑うんじゃないで、認め合える、やさしい世界にしていくために、僕にできることを少しずつやっていきたいと思う。

「尊重し合う事の大切さ」

広島市立五日市南中学校 二年 谷 本 苺 彩

「外斜視」学校からもらって帰った眼科検診の手紙には、はっきりとそう書いてあった。母に手紙を見せると、少し驚いた様子で、

「お母さんは斜視には見えないけれど、お医者さんにはわかるのねえ。」
と、不思議そうに私の目を見つめていた。

「斜視」その言葉を聞いて、心の奥にしまったはずの情景が、言葉が、一気によみがえり、私の胸をぎゅつと締め付けた。

「あなたはおじいちゃんに似て生まれなくてよかったわね。」

小さい時の記憶だ。曾祖父の知り合いだというその女性とは、その時初めて会ったばかりだった。幼い私にはその言葉の意味が分からなくて、ただその女性を見つめていた。

「あなたは女の子だから、あんな目だったらかわいそうよ。」

その言葉を聞いて、やっと意味を理解した。何かを言い返そうと言葉を探したけれど、驚きと悔しさで胸がいっぱいになり、どうしても言葉が出てこなかった。いや、本当は言い返す勇気がなかったのだと思う。

「どうしてそんな事を言うの？女の子と言うなら、男の子だったら良いの？」

様々な疑問と悲しみが、一気に私をおそった。どんな時でも優しく、誰に対しても思いやりを持つている曾祖父は、私の自慢の人だ。斜視という言葉を知ったのはその時で、それまで何千回と見た顔に何かを感じた事は、一度もない。曾祖父ははっきりと分かる斜視だが、私にとっては気にもとめない事で、大好きな曾祖父である事に変わりはない。だがこの女性にとっては違ったらしい。怒りと悲しみに震えながら母に話すと、驚く事に母も、小さい頃に同じ様な事を別の人に言われた事があると話してくれた。

「悲しい思いをしたね。もしかしたらあなたを傷つけるつもりはなかったかもしれない。素直に「よかったね」という気持ちで言ったのかもしれない。けれど、大切な人の事をそんな風に言われると、とても悲しくなるね。」そう話している母の顔は、私と同じ表情をしていたと思う。私は言い返さなかった事をとて悔やんでいた。

小学生の時、友達の間でクラスの子の悪口をひんばんに聞く時期があった。「気持ち悪い」「うざい」そんな言葉に対する同調を求められ、返答に困っていた。私はそんな風に思った事はないけれど、相手が求めている返事をしないと、今度は私が悪口を言われるかもしれない。嫌われるかもしれない。そんな思いがあり、あい昧な返事でごまかしていた。

そんな中、悪口を言われていた子が落ち込んでいるのを見かけた。聞かなくても理由は想像ができた。その子は、私が学校に忘れ物をした時には家まで届けてくれたり、勉強で分からない所があると、一緒に考えてくれたりした。私が困っている時には、いつ

も声をかけてくれるような、とても優しい子だ。それなのに声もかけられない弱い私は、見ている事しかできなかつた。胸の奥がぎゅつと苦しくなり、あの時と変らない自分自身に、ほとほと嫌気がさしていた。

ある日、友達から驚く話を聞いた。友達四人が遊びに行った時に、一人が私の事を悪く言っていたらしい。それを聞いた一人の子が私の事を、

「そんな子じゃないよ。だから悪く言わないでほしい。」

と怒ってくれたのだ。その事でケンカになり、一人で帰ってしまったとも聞いた。その話を聞いた私は言葉を失った。それは私がどうしてもできなかつた事だからだ。斜視の話の時も、友達が傷ついた時も、私は自分を守る事しかできなかつた。なのにその友達は、どう思われるかよりも自分の思いを素直に伝え、私を守ってくれたのだ。この出来事は私の心を大きく動かし、変わろうと思うきっかけを与えてくれた。

人の価値観や考え方はそれぞれ違う。違うからと言ってすぐに否定するのではなく、「そういう考え方の人もいるんだ。」

と受け入れる力が必要なのだと思う。その上で自分はどう思うかを伝えたい。誰かが困っていたら声をかける事。誰かが間違っていたら優しく伝える事。そして自分自身に正直に生きる事。そんな当たり前の事が、実は平和への近道なのだと気づかされた。それから見た目への偏見は本当に傷つく。一番大切なのはその人の人柄なのだという事を、私は知っている。一人ひとりが相手の立場になって考える事を大切にすれば、少し

ずつ社会は変わっていくはずだ。平和な生活は誰かに与えてもらえるものではなく、自分達で作っていかねければならない。私は周りの人を大切にしながら、少しでも平和な社会に近づけるように行動していきたい。

心の見えない傷と向き合って

広島市立瀬野川中学校 二年 坂口 遥

私が「人権」について本気で考えるようになったのは、一人の人との出会いがきっかけでした。

その人は、学校の友達ではありません。私が習い事で通っていた教室で知り合った、少し年上の知人です。おだやかで、いつもにこにこしていて、話しているとやさしい気持ちになれる人でした。私はその人と会える日が、毎回とても楽しみでした。

ある日、その人がいつもと違う、少し真剣な表情で話し始めました。

「私、強迫性障害っていう病気があるんだ。」

私は少し戸惑いました。「強迫性障害」という言葉を聞いたことがなかったからです。顔には出さなかったけれど、頭の中には「どんな病気なんだろう？」という疑問が浮かんでいました。その人は、自分の症状をゆっくり、丁寧に話してくれました。

「手が汚れている気がして、何回洗っても不安が消えないんだ。一日に何十回も手を洗っちゃうこともあるの。手が荒れちゃっても、傷が出来てもやめられないの。頭では『汚れはもう取れてる、もう大丈夫』って分かっているのに、不安が止まらないんだよね。」

私はとても驚きました。あんなに明るく、優しい人が、そんなに苦しい思いをしているなんて、少しも気付けなかったからです。

「あとね、家の鍵をちゃんと閉めたか心配で、何度も何度も戻って確認しちゃう。ちゃんと閉めたって思っても、不安で動けなくなることもあるんだ。」

少し笑いながら話してくれたけれど、その奥にある長い間の我慢やつらさが伝わってきました。そのとき、私はようやく「ああ、これが強迫性障害なんだ」と、少しだけ理解できた気がしました。そして、そのあと気付きました。「潔癖症みたいなものかな？」と症状を聞いたときはなんとなく思っていた自分の考え。それは全然違っていたんだと。その人は、こんなことも言っていました。

「見た目では強迫性障害だと分かりにくいから理解されにくいんだよね。『気にしすぎ』とか、『神経質すぎる』って言われることもある。でも、好きでやってる訳じゃない。やめたくてもやめられない。それが一番つらいのに……。」

私は胸が苦しくなりました。心の中の苦しみは、目に見えないから気付かれにくい。でも、その苦しみは見えるもの以上に深いこともあるのだと初めて知りました。

辞書で「人権とは全ての人が自分らしく生きるための権利」だと書いてありました。でも、その人の話を聞き、思いました。「見えない苦しみを抱えた人は、『自分らしく』を出すことさえ難しくなることがあるんだ」と。もし、周りの人が相手のつらさに気付かず、ただ「変だな」と思って遠ざけてしまったら？その人は、自分らしく生きる

どころか、毎日を生きたことさえ、つらくなってしまいかもしれません。

その人は最後に、こんな風に言ってくれました。

「全部を理解してもらえなくてもいい。でも、『そうなんだね』って受け止めてもらえるだけで心が少し軽くなるんだ、聞いてくれてありがとう。」

私はこの言葉が忘れられません。「人権を守る」というと、難しそうに感じるかもしれないけれど、そうではないかもしれません。相手を知ろうとすること。分からなくても、笑わずに受け止めようとすること。それだけでも誰かの心のよりどころになれる。私はこの出会いを通して、そう学びました。

これから私は、「見えないつらさ」に気付ける人になりたいと思います。もし周りの人が苦しんでいたなら、そっと「大丈夫？」と声をかけたいです。そして、どんな人でも自分らしく生きていける社会を創る一員になりたいと思っています。

心の中の見えない傷は、多分誰の中にもあるのかもしれない。だからこそ、私はその小さな傷に気付ける人でありたい。逃げずに、優しく向き合える人でありたい。誰かの痛みに気付き、「そうなんだね」と言える人でありたい。

ある人との出会いが、その思いを私にくれました。そして、これからの私の生き方も、そっと照らしてくれています。

分類

広島市立瀬野川東中学校 三年 築山 真帆

「なんであの人と話すん？絶対楽しくないじゃん。いい子ぶってんの？」

クラスメイトからの言葉。正直、少し傷ついた。ああ、中学生って、すごく難しい。ことあるごとに「空気が読めない」だとか「ノリが悪い」だとか、「陽キャ」「陰キャ」だとか。

人間関係についてすごく敏感な時期なのはわかる。私だってそうだ。でも、その人の個性を無理矢理「こういう人」と分類して、よく知りもしないのに苦手と感じる人が多い気がする。人柄を勝手に決めつけずに、ちゃんと話してみればいいのに、と思う。

私が特に気になるのは「陽キャ」「陰キャ」という言葉だ。クラスの中の人間が、自分や相手の立ち位置をこの言葉で決めている。そして、「陽キャは怖い」「陰キャだから無理」など、その不確定要素によって相手の性格を決めつけて、離れていってしまった。そんな無茶苦茶な分類なんてせずに、一人ひとり、個々の存在として相手を見てみればいいのになあ、と思う。

でも、クラスという集団の中で私がこの思いを口にすれば、最初の言葉のように「いい子ぶってる」と悪口を言われるだろう。なぜなら私たち中学生にとって、そういった

分類は当たり前のこと、いわば「日本人」や「アメリカ人」みたいなものだからだ。そして大多数の人は国境を越えようとしめない。パスポートをつくろうとすることはきれいなことなのだ。

この「陽キャ」「陰キャ」という考え方は規模や程度が小さいだけで、戦争や差別と同じようなものだと思う。よく知らない相手を勝手に分類して、「自分とは違う」と決めつける行為、その分類によって歩み寄ろうとしない姿勢。そして、それが当たり前になっていく空気。どう考えてもおかしい。おかしいのに、気づいていない人がたくさんいる。私だって、「変だ」と初めて気づけたのは、二年生の時、担任の先生の「やっぱりグループはできちゃうよね。」という言葉聞いたから。あの言葉がなければ、違和感すら覚える機会が無かったかもしれない。戦争や差別はおかしいと感じるのに、分かるのに、同じことをしている自分たちに気づけない。あるいは無意識に気づくことを避けているのかもしれない。私たちにとって一番重要なのは、「変わった人」と思わないこと、そして、自分の居場所を確保することだから。

私は、そんな中学校の雰囲気嫌だ。誰の目も気にせず、いろんな人と話したい。私の周りには、こんなに優しく面白く面白くいるのに、その人たちと話すだけで変な目で見られるなんて、理不尽でしかないし、私たちにあって、多様な人とのコミュニケーションの機会をなくすことは、大きな損失だと思う。それに、自分が「話したい」と思える人がいるということは、とても幸せなことだ。

だから、現状を変えたい。今、「陽キャ」「陰キャ」という分類を当たり前にしている人に、「陽キャ」「陰キャ」という言葉を使うことに違和感を抱くようになってほしい。

そして、前述の通り、私一人が「おかしい」と言ったところで、「いい子ぶってる」と一蹴されるだけだ。同じ考えをもつ人がもつと増えて、みんなが話したい人と気軽に話せる世の中になればいいな、と思う。周りのたくさんさんの人の魅力と個性に気づける私たちがやりたい。

相手の立場になって

広島市立伴中学校 三年 中 植 菜 月

私は、幼い頃から祖父母の家へ訪れることをいつも楽しみにしていました。祖父は、力尽きるまで鬼ごっこやかくれんぼをして遊んでくれて、祖母は、私の自由奔放な話を何度も頷いて笑顔で聞いてくれて、私の大好きな祖父母であり、自慢の祖父母でした。

しかし、私が小学五年生の頃、病院で祖父母二人ともが、パーキンソン病であると突然診断され、その後、あんなに元気だった祖父は、段々と体全体が不自由になり、歩く事も儘ならなくなるほど進行してしまい、祖母は非運動症状として、うつになって「死にたい」を反復するようになり、パーキンソン病は完治しないという事実から失望し、いつも私を優しく見つめる祖母の瞳の奥にある光は輝きを失いました。

祖父母の家に、私の家が近かったこともあり、祖父が何度もこける度に私の母は祖母の家へ出向き、休日も祖父母を散歩へ連れて行く姿を見て、どこか寂しさを感じつつ、自分の事が自分でできないなんて格好悪いと感じるようになってから、私と祖父母との間に距離ができ、祖父母の家を訪れても、前のように、話をしなくなりました。

久しぶりに、母と祖父母の家へ訪ねると、祖母は「生きててもなんの希望もないから死にたい」と泣きわめいていて、その姿は私の大好きな祖母とは違い、心が苦しくなり

ました。その反面、何度も私の前で「死にたい」と言う度に心に鉛をどんどんのせられていくように負荷が限界に達し、感情は悲しみから怒りへと移り変わりました。私は当時、パーキンソン病に非運動症状がある事も知らず、

「心の病気は、パーキンソン病に関係なく、心の持ちよう次第だと思う。治そうと思えば治せるじゃん。今日、来なきや良かった。」

と祖母に皮肉を言いました。私は祖母の憂いのある顔を見無視し、母に着替えさせられる祖父を横目に、嘆息しました。

数か月後、祖母の事が気になって、パーキンソン病について初めて調べてみると、パーキンソン病には、非運動症状として、うつがある事や、バランスを崩しやすくなり、その上、筋肉がこわばることで思うように手足が動かせず、どうしても日常生活に支障をきたしてしまう病気だという事や、散歩をする事で進行を遅らせられるという事も知り、なんで、思うように動かせない足を動かして散歩をする祖父を素直に応援できなかったのか。なんで、祖母のつらい思いを受け止められなかったのか。後悔がどつと押し寄せて、私は、久しくついて行っていなかった祖母の通院する病院について行き、祖母に対して嫌悪感を抱いていた事や、祖母に対して失言をした事を謝ることにしました。

祖母の家に寄って母が「病院行くよ」と声を掛けると祖母は私に気付くなり、「なっちゃん、元気にしとったかい。」

と祖父は微笑み、祖母も、

「なっちゃん顔が見れて、嬉しいよ。」

と、言ってくれました。祖父母の慈愛に満ちた目を見てみると、胸が温かくなり、素直に謝る事ができました。すると、祖父母は何度も、「良いんよ。」と言ってくれました。人を思いやる気持ちは、相手の立場になって考える事で形成されるものであると思います。だからこそ、少子高齢化社会でこの先、生きる私達は、高齢者の方が困っていたら、「大丈夫ですか。」と声を掛けるべきだと思います。

そして、私を大切に想ってくれている祖父母への感謝の気持ちを、祖父母をサポートする事で、形にしていきたいです。

【広島地区大会佳作】

宗教二世と出会って。

広島市立広島中等教育学校 二年 匿名

私が小学二年生の時、クラスに「ハヤト」という子が転校してきました。少し控えめで人見知りな印象でしたが、「本が好き」という共通点で、私達はすぐに打ち解けました。休み時間には互いに好きな本の紹介をし合ったり、放課後には一緒に図書室に通ったりする日々は、本当に楽しかったです。

しかしある日、クラスメイトの何人かが、彼女のことを小声で噂しているのを耳にしました。「神社にも寺にも行けないんだって」「クリスマスがないらしいよ」「変な歌を覚えさせられるんだって、気持ち悪いよね」「同じクラスとかマジで最悪だよ、呪われそうじゃん」——そんな言葉が、どこか好奇心と悪意のようなものが混ざった調子で交わされていました。

しかし、当時の私には、その話の意味がよくわかりませんでした。なぜ彼女が「気持ち悪い」のか、なぜ彼女と同じクラスであることが「最悪」なのか、クラスメイトがそう言っていたことに対する怒りよりも、「なぜ彼女が」という疑問が私の中では大きかったです。ただ、その後の担任の先生から、「ハヤトは宗教二世なんだよ」と教えて

もらい、少しずつ事情が見えてきました。宗教二世とは、特定の宗教を信仰する親の元に生まれ、幼いころからその宗教の影響を受けて育った子供のことであり、彼女も同様に育ってきたのだといえます。

しかし、その話を聞いても、彼女に対する印象は何一つとして変わりませんでした。私は私と異なる価値観や文化を持っているというだけで、それが悪いことだとは微塵も思いません。事実、彼女はあの頃の私にとって一番の友人でした。

けれど、現実には「偏見」がありました。「宗教を信仰しているなんておかしい」という理由で彼女を遊びの輪に入れなかったり、距離を取ろうとしたり、無視をしたりと、浅はかな知識だけで彼女を差別する人は多くいたのです。ある日の昼休み、彼女が一人で静かにうつむいている姿を見た時に感じた、あの言いようのない悔しさと哀しさを、私は今でも忘れられません。

その頃から、私は「人権」という言葉について考えるようになりました。人には誰にでも、ありのままに生きる権利があります。信仰の自由もその一つであり、それを理由に差別を受けたり、孤立させられたりすることがあってはなりません。例え自分と異なる価値観を持つ相手であっても、互いに尊重し合うことこそが人間社会の基本なのだと、小学校での経験を通して学びました。

そして今、私は中学生になりました。ニュースや書籍を通じて、宗教二世として育った人々が大人になってもなお、苦しみや生きづらさを抱えていることを知りました。家

庭内で信仰を強制されたり、周囲から偏見の目を向けられたり——それは、子供であるうと、大人であろうと、決して軽く見過ごしてはならない現実です。

皆さんは、ここまでの文章を読んで「おかしいな」と思いませんでしたか。これはあくまで私の想像に過ぎませんが、「なんで名前は『ハヤト』なのに『彼女』なんだろう」と思ったのではないのでしょうか。でもこれは何一つとしておかしなことではありません。だってハヤトは、女の子なのですから。皆さんが抱いた違和感、それが偏見です。可愛らしく、華やかな名前は女の子、かつこよく、たくましさを感じさせる名前は男子、そんな知らず知らずに抱いている偏見が、その人自身の存在を否定し、苦しめることに繋がるのです。

人は誰しもが、それぞれ違うものを抱えて生きています。宗教も性別も、その一つに過ぎません。文化、言語、考え方、生き方、それらの違いを認め合い、理解しようとしていなければ多様な社会は成り立たないのです。

「あなたは恵まれた環境で育ったから、そんな綺麗事が言えるんだ」と思われても仕方がないことはわかっています。

でも、六年前のあの日、私は確かに彼女の傍にいようと決めました。互いに認め合い、尊重し合ったからこそ、私は彼女と友人になれたのです。だからこそ私は、これからもあの時の自分のような心を持ち続けていきたいと思えます。そして、相手の声に耳を傾け、「あなたはあなたのままでいい」と、偏見や差別に対して「それはおかしい」と伝

えられる人でありたい——そう、心から思います。

ただ残念なことに、彼女は私と出会って丁度一年後に再び転校してしまいました。もう今となっては、彼女の顔も、彼女の声も、彼女の苗字でさえも上手く思い出せません。それでもこの作文が書いたのは、この世界に確かに、彼女と過ごした日々があったからです。

だからどうか、彼女が今、幸せでありますように。

また会おうね、ハヤト。

「偏見」を無くす、第一歩

広島市立五日市南中学校 二年 田 澤 三智花

みなさんは、「障害者」と聞くと、どのようなことを思いますか。「かわいそう」、「普通じゃない」、「変」、いろいろな意見があると思います。では、ここで一つ、私の弟のことについて話したいと思います。

私の弟が生まれたのは、私が五才の頃でした。生まれたばかりの弟はまだ本当に小さくて、可愛くて可愛くて仕方がありませんでした。しかし、それはこの頃だけの話でした。少し違和感を抱いたのは数年後・・・、私が四年生、弟が年中の時です。ある日、家族で出かける用事があったのですが、弟は特定の上着をとでも着たがっていました。しかし、その上着は非常に薄手で、冬に着るのにには寒すぎたため、母が「この上着は寒いから別のを着よう？」と説明してあげたのですが、弟は、「嫌！これが着たいの！」と言って、大泣きしてしまいました。この時、私は「ワガママだなあ。」くらいにしか思いませんでしたが、違和感はどんどん大きくなっていきました。またある日のこと、弟といっしょに学校に行っていました。しばらく歩いて、すぐ横が道路の細い道に差し掛かった時のことです。後ろにも登校中の生徒が大勢いるのにもかかわらず、弟はかべに沿ってゆっくりと歩き始めたのです。そのせいで、後の人達はどんどんつかえてい

き、私は弟に慌てて注意をしました。すると弟は「このかべの終わりまで続けたい！」と、わめき声を上げたので、カチンときてしまい、結局怒鳴ってしまいました。そのようなことが、次の日も、また次の日も続き、私の心の中の違和感が、モヤモヤに変わっていききました。ある時、私は母に相談しました。「なんであの子は空気が読めないの。」「どうして人に迷わくをかけてるのに謝らないの。」「どうしてちゃんとできないの。」「と。すると、母は言いました。

「あの子はね、軽度の自閉症なの。」「自閉症、初めて聞く言葉でした。母は続けて、「だから、周りの子とちよつと違う行動をとったり、空気を読めなかったりするかもしれない。だけど、それを褒、だとか変わってるって言っちゃいけないの。だってそれは、その子なりの個性なんだから。あの子のことも「個性がある人だな」って思って、見守ってあげて。」「私は、はつとしました。今まで、障害のある方のことを、内心「変な人」と思っていたからです。弟のことも、「どうせあの子は普通じゃない。」「と思ったり、「近づかないで。」「と障害を理由に偏見を持ち、つきはなしてしまっていました。しかし、母の言った通り、障害は「個性」です。周りと違うからと言ってその子を蔑ろにするのではなく、その子なりの「個性」と捉え、受け入れるべきなのではないでしょうか。私はその日から、先入観や偏見を持つのではなく、個性や特性を受け入れていくべきだと思えるようになりました。

今回の私の話のように、偏見をもつ人は世の中に数えきれない程います。特に、障害

に対してはそうです。初めに言ったように、「変」や、「普通じゃない」と思う人もたくさんいるでしょう。私の弟に関しても、上着にこだわる、や、空気が読めない、という行動は自閉症の症状です。しかし、だからといって、「変わってる」というわけではありません。これも、この子なりの「個性」なのです。また、「個性」はどんな人にもあります。私や弟、周りの知らない人や、この文を読んでいるあなたにもあるはずですから、障害のある方たちも、一人の人間であることには変わりありません。そのため、「普通」の人達と比べるということは、あつてはなりません。周りとは違つても、それを一人の「人間としての個性」として受け止め、違うから否定するのではなく、違いがあるということを確認合う。それが、障害への偏見を無くす、第一歩なのではないでしょうか。一人一人が、「違い」を「個性」として受け止めていけば互いを認め合えるはずです。いつか、障害のある方、いや、それ以外の様々な人への偏見がなくなること、私は願っています。

誰もが生きやすい社会へ

広島市立仁保中学校 三年 義 満 悠充里

私はイングリッシュキャンプに参加したときに出会ったA L Tの先生を通して「L G B T」という言葉を自分の中で深く考えるようになりました。いままでも、学校の授業でL G B Tとはどういうものなのか、カミングアウトされたときどういう態度で相手の話を聞くべきかなど、中学校3年間を通して学んできました。しかし、実際にL G B Tの当事者の人と話したことで、ちがいや人権について自分の考えが大きく変わってきました。

その先生は、とても明るく、面白い先生で私が去年イングリッシュキャンプに参加したときにも会っていました。去年会ったときは男の人だけどスカートをはいたり、大きなネックレスをつけていたりしたので、私は世界にはいろんな文化があるんだなと思っていました。たとえばスコットランドのキルトのように、外国では男の人もスカートをはくことを聞いたことがあるからです。だから、その時は気にしていなかったです。でも、今年のキャンプで、その先生は「I don't like boy. I like girl. I am Ms.○○」と私

は女の子が好きだからミスと呼んでといていたのを聞いて私はハッとしました。去年先生がはいていたスカートは文化だからではなく自分の性のあり方としてはいていたこ

とに初めて気付きました。きっかけは、友達と先生と会話してたときでした。私と同じグループの友達が「自分の学校のALTの先生がこのキャンプに来ているかも」と言っていて、似ている先生がいなか探していました。その時に友達のALTの先生が男だったので私はふざけて、先生の名前を「この人じゃない？」と口に出してしまいました。すると先生は笑いながら、「No, boy.」と言いつつ、ミスと呼んで伝えてくれました。私は一瞬驚きましたが、「Sorry.」と言いつつ、「Ms. O.」と先生の名前を呼び直しました。その時の先生の表情はとても自然で、どうどうしていました。

その瞬間、去年先生がはいっていたスカートのことを思い出しました。あるとき私は「変わったファッションだな」「外国の文化なんだろうな」としか思っていました。でもそれは、先生が自分らしく生きるために選んだ姿だったのです。自分のふざけた発言や男の先生だと決めつけてしまっていたことで先生をきずつけていたらどうしようとして反省しました。でも、先生は笑って受け止めてくれて、しっかり自分のことを伝えてくれました。私はどうしようとカミングアウトしてくれた先生に心を打たれました。それから、私はLGBTについて学校でもらったプリントをもう一度読み返しました。今回出会った先生は、身体の性と心の性が一致しないために、身体に違和感をもつトランスジェンダーの人かもしれません。大切なのは、その人がどう感じているか、どう生きていきたいと思っているか、それを尊重し、受け入れていくことが「人権」だと思います。

しかし、現実にはLGBTの人たちは、まだ生きにくい社会の中にいます。「気持ち悪い」と言われたり、「それは間違っているよ」と言われたり、自分の本当の思いを受け入れてもらえていない人もいます。もし自分がLGBTの人だったとき、身体の性と心の性が一致しないこと自体、すごく不安でカミングアウトすることが怖くなると思います。だからこそ、誰かが自分らしさを大切にしているとき、それを笑ったり、からかったりするのではなく、応援したいです。

「No, boy. I am Ms.○○」の言葉を先生がはつきり言ってくれなければ、私は今でもただ男の人がスカートをはいているとしか、思わなかったかもしれません。先生が自分らしさを大切にし、それを正直に言葉にしてくれたからこそ、私は「ちがいに向き合うことができました。」

人はみんな違います。見た目や考え方、性のあり方も様々です。その中で、大切にすべきことは、違いを受け入れて、お互いを尊重することだと思います。私も何気ない言葉が誰かをきずつけてしまっているかもしれないことを忘れずにいたいです。

これからはLGBTの人たちをふつうじゃないと決めつけず、LGBTをその人らしさとして受けとめられる人でありたいです。そして、みんなが、先生のように自分らしさを大切にしながら、まわりの人のことも思いやれる人になることで、誰もが生きやすい社会になることを願っています。

私の本当に好きなもの

広島市立祇園中学校 二年 澄川 咲綾

私は小学生の時から可愛いものが好きだった。低学年の頃はピンクが好きで、スカートをよくはいていたし、ヘアアレンジやメイクにも憧れがあった。しかし、高学年になるにつれ周りの声が気になり始めた。

私の通っていた学校には髪型の指定がなかったので、低学年の頃からずっと二つ結びをして通っていた。ある日突然、クラスの子に「なんでそんな髪型なの？変だよ。」と気持ち悪がられた。それ以降他の人からも好きなものを笑われ始めた。私自身変だと思っただけは一度もなかったのですが、その言葉たちが深く刺さった。でも、私はそうだよと笑いながら返していた。当時は、嫌われたくない、仲良くしたいという気持ちのほうが強かったからである。その言葉やあの子の表情、声色は何日も私の中で重く響いていた。そして少しずつ二つ結びをしなくなった。

しかし、私の行動とは裏腹に周りの声はどんどん厳しくなっていく。次は私の性格について言われ始めた。

「ぶりっこだよね。気持ち悪い。」

「あの子の話ついていけないわ。」

私が教室に戻った時に偶然聞こえた話だった。その子達は私に気が付いていない様子で私はそのまま席についた。悔しかった。なぜ好きなものを好きと言って、こんなことを言われなければならないのか。そんな疑問が湧いてきた。周りの趣味と少し違うだけで、私の好きなものも、私自身も馬鹿にされてしまう。それを言い返せない自分も嫌になった。そして少しずつではあるが、可愛いものを身につけることが減り、自分の好きなものの話もしなくなつた。誰にも相談できずそのまま好きなものは私のもとから手放されていった

中学生になつた今は、ずっと長かつた髪を肩につかないくらい切つて、私服もズボンが増えて、いつでもマスクをつけるようになった。あの言葉達が今でも頭の中に残つていて好きなものを他人の前に曝け出すことが怖かつた。中学生になつてできた友達に対しても自分と話してつまらなくないか、実は嫌われているんじゃないかという考えが頭によぎるようになった。

それでも中学一年生の時、仲の良い友達数人と遊ぶ時に、勇気を出して好きな服装や髪型で行つてみた。すると、

「いいね。その髪型。」

「それすごく可愛い。」

と言つてくれた。その友達が本心で言つてくれたかどうかは分からない。でも、興味を持って言つてくれたことは確かだ、その言葉が私に少しだけ自信と勇気をくれた。

今でも周りの言うことや評価を気にしてしまうし、小学生の時に言われたあの言葉一つ一つが鮮明に思い出せてしまう。それでももう一度、別のことでもいいから、自分が胸を張って好きを貫くことができるようになりたいと思った。簡単に考え方や行動を変えることができないのは分かっている。でも、こうやって少しずつでも前を向いて自分に素直でいられる私は好きだ。

これは単なる私の体験談であって、言葉によって傷つけられた人達全員が、自信を取り戻して進んでいく訳ではない。言葉をどう捉えるかは人によって大きく違うのだ。少し愚痴るつもりで、軽い冗談のつもりで言った言葉は巡ってその人に届くかもしれない。発する言葉は軽いが、届いた言葉は本人には重く一生残るかもしれない。私達は、傷つけた言葉はもう二度と拭えないことを「知る」ではなく「理解する」ことが重要だと感じた。さらに、違いを認め合うということは容易なことではなくて、それができるまで随分時間がかかることだろう。やり方が分からなくてもいい。それでも少しずつ、一歩ずつを大切にして歩み寄っていくことが、いじめのない社会の実現にとっても重要なことだと私は思う。

いじめをなくすために

広島市立祇園中学校 二年 田 中 陽 菜

「いじめは絶対にしてはいけない。」これは、誰もが知っていることだ。それなのに、なぜいじめはなくならないのだろうか。私は、いじめが起きる原因や、そのいじめに対して私たちができることを、今一度深く考える必要があると思っている。

私は以前、クラスで起きたいじめの場面を見たことがある。直接、暴力を振るってはいなかったが、ある一人の子が何人かのクラスメートから無視されていた。最初はちよつとしたことだったのかもしれない。しかし、気がつけば、その子を否定するような悪口が沢山聞こえるようになってきた。その子は、何もないように過ごしていたが、本当は、かなり傷ついていたと思う。

私はその様子を見ながら、「これはいじめじゃないか」と思っていた。しかし、「自分が口を出したところで何も変わらないかもしれない」とか、「自分が仲間外れにされるのが怖い」と思い、結局何もできなかった。そのとき私は、いじめを止める勇気を持ってなかったのだ。

しかし、ある日、担任の先生がそれに気づいた様子で、授業を自習にした後、一人ずつ呼び出して、静かに話を聞き始めた。私のところにも順番が来て、「○○さんのこと

で何か気づいたことはある？」と聞かれ、私は「自分は何もしてなかった。見て見ぬふりをしていた」と強く後悔した。

いじめは、する人だけでなく、見て見ぬふりをする人によっても深刻化していく。自分が直接いじめに加担していなくても無関心でいることが、いじめを助長してしまうのだ。自分が無意識のうちに加害者の一部になっていたという事実には、私は大きなショックを受けた。

それ以来、私はいじめに対して無関心でないことを意識するようになった。少し元気がなさそうな子に「大丈夫？」と声をかけたり、周りに一人ぼっちの子がいたら声をかけに行ったりするようにしている。小さなことかもしれないが、誰かが勇気を出して一歩踏み出すことが、いじめをなくす第一歩だと思っている。

私たちはみんな、違う考えや感じ方を持っている。見た目や性格、得意または不得意なことそれぞれ違う。その違いをからかいの対象にしたり、仲間外れにしたりするのはなく、お互いを認め合うのが大切だ。違うからこそ、助け合えることもあるし、学び合えることもあると私は考えている。

また、いじめの問題は、学校だけで起きているわけではない。今の時代は、SNSなどのインターネット上でも言葉を使いたいじめが多く見られる。顔が見えないからこそ相手の気持ちを考えずにひどい言葉を書いてしまう人もいる。しかし、言葉には大きな力がある。人を勇気づけたり励ましたりする力もあれば、深く傷つけてしまう力もある。

だからこそ、どんな場所でも「思いやりのある言葉」を選び使うことが、人権を守る第一歩であると思はる。

いじめをなくすために、特別な力も特別な立場は必要ない。一人ひとりが「これはいじめだ」と気づき、「それは間違っている」と声をあげる勇気を持つこと、そして「私は絶対にいじめをしない、許さない」という強い意志を持つことが何よりも大切である。学校や社会全体が「いじめをすることは決して許されないこと」という共通の意識を持つことで、少しずつでもいじめのない世界に近づいていけるのではないだろうか。

私はこれからも、自分にできる小さなことをたくさん積み重ねていきたい、と思っている。誰もが安心して、自分らしくいることができる学校、そして社会を目指して、まずは自分自身が「優しさと勇気を持って誰よりも早く行動できる人」であり、自分にも他人にも、人権があることを理解、意識してこれからの過ごし方していきたい。

第 44 回全国中学生人権作文コンテスト広島地区大会 応募校

広島市立吉島中学校	広島市立国泰寺中学校
広島市立牛田中学校	広島市立福木中学校
広島市立段原中学校	広島市立仁保中学校
広島市立宇品中学校	広島市立似島中学校
広島市立己斐上中学校	広島市立城南中学校
広島市立安佐中学校	広島市立祇園中学校
広島市立祇園東中学校	広島市立伴中学校
広島市立安佐南中学校	広島市立長束中学校
広島市立高取北中学校	広島市立白木中学校
広島市立落合中学校	広島市立可部中学校
広島市立口田中学校	広島市立広島中等教育学校
広島市立瀬野川中学校	広島市立阿戸中学校
広島市立矢野中学校	広島市立瀬野川東中学校
広島市立三和中学校	広島市立美鈴が丘中学校
広島市立五日市中学校	広島市立五日市南中学校
広島市立湯来中学校	広島市立砂谷中学校
広島大学附属東雲中学校	府中町立府中緑ヶ丘中学校
海田町立海田中学校	熊野町立熊野中学校
熊野町立熊野東中学校	北広島町立芸北中学校
北広島町立豊平学園	北広島町立大朝中学校
北広島町立千代田中学校	

応募校数 41 校 応募総数 2876 編

第 44 回全国中学生人権作文コンテスト感謝状贈呈校（広島地区分）

広島市立国泰寺中学校	広島市立己斐上中学校
広島市立伴中学校	広島市立白木中学校
熊野町立熊野東中学校	

こどもの人権110番

受付時間：平日8時30分から午後5時15分まで

フリーダイヤル ぜろぜろなのひゃくとおばん

0120-007-110

いじめにあったとき、困ったことがあったときは、
携帯・スマホ・PHSからも利用できます。

インターネット人権相談受付窓口

<https://www.jinken.go.jp/> (パソコン・携帯電話・スマートフォン共通)



SNS (LINE) による人権相談

友だち追加はこちらから！

アカウント名：「SNS人権相談」 検索ID：@snsjinkensoudan



第四十四回全国人権作文コンテスト

広島地区大会入賞作文集

令和八年一月 印刷
令和八年一月 発行

発行者 広島人権擁護委員協議会

広島市中区上八丁堀六番三十号

広島法務局人権擁護部内

印刷者 鯉城印刷株式会社

広島市中区十日市町二丁目八番二号

◎ 本作文集を転載又は教材等に使用される
場合は左記にご連絡ください。

広島法務局人権擁護部

電話 〇八二一三二八一五七九〇

FAX 〇八二一三二八一八〇八七

